

韓国語のいわゆる軽動詞構文の分類

和田 学

1. はじめに

韓国語には動作を表す名詞 (Verbal Noun、以下 VN) と ha-ta を含んだ構文に表面的に類似した形式が存在することが知られている。VN は自動詞 (非能格、非対格) 的なものと他動詞的なものがあるが、他動詞的な VN を含んだ構文には少なくとも 3 つの類似した形式がある。次の例は、K. Park (1992, 117) から引用した例である。

- (1) a. John-i ku saken-ul cosa-ha-yess-ta.
John-Nom the affair-Acc investigation-do-Past-Dec
- b. John-i ku saken-ul cosa-lul ha-yess-ta.
John-Nom the affair-Acc investigation-Acc do-Past-Dec
- c. John-i ku saken-uy cosa-lul ha-yess-ta.
John-Nom the affair-Gen investigation-Acc do-Past-Dec

本稿では、VN を含む述語の意味上の目的語 ((1a-c) の ku saken (the affair) がこれに該当する) を、単に目的語と呼ぶこととする。(1a) では、目的語は対格を伴っており、VN は無標識である。本稿ではこのタイプを VN-ha-ta 構文と呼ぶことにする。(1b) では、目的語、VN 共に、対格標識を伴っている。このタイプを VN-Acc ha-ta 構文と呼ぶ。(1c) では目的語は属格を伴い、VN は対格を伴っている。このタイプは後述する様に、目的語が VN と名詞句を形成することが明らかたため、VNP-Acc ha-ta 構文と呼ぶ。本稿では、VN-ha-ta 構文と VN-Acc ha-ta 構文を中心に扱うが、これらをまとめて指す場合には VN(-Acc) ha-ta 構文と表記する。

(1) の構文に関する先行研究は多くあり、ha-ta に先行し得る VN の意味的特徴、(1b) の VN-Acc ha-ta 構文の対格が何によって付与されるのか、ha-ta が軽動詞か重動詞か、Grimshaw and Mester (1988) の主張する項の転送の有無などに重点が置かれている。本稿では、これらの具体的な分析に関しては必要が無い限り言及することを避け、(1) に挙げた三種類の構文がどのように分類されるべきかという、より基本的な問題について論じる。分類に関しても、いくつかの先行研究において言及されている。大きく分けて、(1) の三つのタイプを区別しない立場、¹ 共に VN が対格を取る VN-Acc ha-ta 構文と VNP-Acc ha-ta 構文を一つのグループとして扱う立場 (H.-D. Ahn (1989))、共に目的語が対格をとる VN-ha-ta 構文と VN-Acc ha-ta 構文を一つのグループとして

¹ 例えば 서정수 (1975, 11) では、VN の後に対格、限定詞 (delimiter) 等が挿入される場合の VN を全て分離性先行要素と呼び、同じように扱っている。

扱う立場 (K. Park (1992)) がある。これらの分類では、(1) の三つの形式の内、全て、あるいは二つを一つのグループと扱っているが、本稿では、これら三種類の形式が互いに異なった独立した構文であることを主張する。特に、本稿では VN-ha-ta 構文と VN-Acc ha-ta 構文が様々な現象に関して、異なった振り舞いをする事から、この二つが異なった構文であることを中心に論ずることを目的とする。

本稿のもう一つの目的は、VN を含んだ構文に関する観察データを再考することにある。VN を含んだ構文について多くの先行研究があるが、これらの論文に記載された観察が、研究者毎に対立する場合が珍しくない。即ち、ある研究者が適格と判断した例文が他の研究者によって不適格とされることが少なからず生じている。それぞれの研究者が異なった観察結果に基づいて分析を行っているため、全く異なった分析が乱立しているとも言える。本稿では、体系的な調査を行い、先行研究の観察を再検討した。その結果、上述した様に、先行研究における観察結果にかなりのばらつきがあるのに対し、本稿の調査では、複数の話者を通じて、かなりの程度の一貫性が得られ、本稿で採った調査方法が単純ではあるが、有効であることが示された。

本稿の構成は次の通りである。まず、2 節では、VN を含んだ構文の分類に関する先行研究として、VN(-Acc) ha-ta と VNP-Acc ha-ta を明確に異なった構文とする K. Park (1992) の主張を概観しこれを採用する。3 節では、残りの VN-ha-ta 構文と VN-Acc ha-ta 構文がいくつかの現象に関して明確に異なった振り舞いを示すことを、調査に基づいて示し、これらが異なった構文であると主張する。この主張は、両者が同一構文の変種であるとするいくつかの先行研究と対立する主張である。4 節は、まとめと、本稿で採った調査の方法について述べる。

2. VNP-Acc ha-ta と VN(-Acc) ha-ta : 先行研究

この節では、VN-Acc ha-ta 構文と VNP-Acc ha-ta 構文が異なった構文であるとする、K. Park (1992) の議論を概観する。

VN 及び ha-ta を含んだ構文で顕著なのは、(1) に示した様に、VN が対格を採るものと採らないものがあるということである。この対格標識の有無に基づいて、これらの構文を二分する立場を採ったものとして、H.-D. Ahn (1989)、J.-R. Kim (1994) が挙げられる。一見すると、対格の有無による区分は、他の現象と相関している様に見える。VN に対する連体修飾、VN のスクランプリング、VN と ha-ta の間の副詞の挿入などに関して、これらの操作は VN が対格を伴う場合には可能で、VN が対格を伴わない場合には不可能である。

- (2) VN(-Acc) の連体修飾
- a. Swuni-ka elyewu-n/kunye-uy/i kongpwu-lul ha-yess-ta. J.-R. Kim (1994, 23)
Swuni-Nom difficult/she-Gen/this study-Acc do-Past-Dec
'Swuni did a difficult/her/this study'
- b. *Swuni-ka elyewu-n/kunye-uy/i kongpwu-ha-yess-ta.
Swuni-Nom difficult/she-Gen/this study do-Past-Dec
'Swuni did a difficult/her/this study'
- (3) VN(-Acc) のスクランプリング
- a. kongpwu-lul Swuni-ka kunye-uy chinkwu-wa ha-yess-ta. J.-R. Kim (1991, 26)
study-Acc Swuni-Nom she-Gen friend-with do-Past-Dec
'She studied with her friend'
- b. *kongpwu Swuni-ka kunye-uy chinkwu-wa ha-yess-ta.
study Swuni-Nom she-Gen friend-with do-Past-Dec
'She studied with her friend'
- (4) VN(-Acc) と ha-ta の間への副詞の挿入
- a. Swuni-ka kongpwu-lul nay chwuchuk-ey, ha-yess-ta. J.-R. Kim (1991, 27)
Swuni-Nom study-Acc, my guess-Loc do-Past-Dec
'Swuni did, I guess, her study'
- b. *Swuni-ka kongpwu, nay chwuchuk-ey, ha-yess-ta.
Swuni-Nom study, my guess-Loc do-Past-Dec
Swuni did, I guess, her study'

対格の有無と上記の現象が相関するという一般化に対して、K. Park (1992, 72,77) は (2-4) では自動詞的 VN を含んだ例のみを元に議論されていることを指摘し、他動詞的な VN を含んだ事例も含めて検討すると、上記の単純な区分は成り立たなくなること示している。目的語が対格を伴って実現している場合、VN(-Acc) の連体修飾も、VN(-Acc) のスクランプリングも許されない。

- (5) VN(-Acc) の連体修飾²
- a. *John-i ku nonmwun-ul ppalu-n chulphan ha-yess-ta. K. Park (1992, 73)
John-Nom that paper-Acc fast (Adjective) publication-do-Past-Dec
'John published the paper early.'

² 同様の観察については、임흥빈 (1979)、H.-S. Han (1988)、H.-D. Ahn (1991, 26)、K.-S. Lee (1991, 104)、J.-I. Yeom (1994)、Hong and Sohn (1999) などにも見られる。一方で、この様な例が適格であると判断する研究者としては、B.-S. Park (1981)、김영희 (1988, 96)、최기용 (1994)、H.-R. Chae (1997) などがある。この観察結果の対立については、3. 3で述べる。

b. *John-i ku nonmwun-ul ppalu-n chulphan-ul ha-yess-ta.

John-Nom that paper-Acc fast (Adjective) publication-Acc do-Past-Dec

(6) VN(-Acc) のスクランプリング

a. *cosa-lul, John-i ku saken-ul ti ha-yess-ta. K. Park (1992; 74)

investigation-Acc John-Nom the affair-Acc do-Past-Dec

'John investigated the affair.'

b. *cosa,, John-i ku saken-ul ti ha-yess-ta.

investigation-Acc John-Nom the affair-Acc do-Past-Dec

K. Park (1992,117) は、他動詞的 VN の事例を検討し、VN の対格の有無による分類では妥当な分類ができないことを主張し、代わりに、目的語が (1a,b) の様に対格で標示されているか、(1c) の様に属格で標示されているかによって分類されるべきであると主張している。K. Park は、目的語が対格を付与されていることから、前者を動詞的格体系 (Verbal Case System) と呼び、目的語が属格を付与されていることから、後者を名詞的格体系 (Nominal Case System) と呼んでいる。本稿で用いている名称と対応させると、動詞的格体系には VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta が該当し、名詞的格体系には VNP-Acc ha-ta が対応する。以下では、K. Park (1992, 124) に従い、他動詞的 VN を例に、VN-Acc ha-ta と VNP-Acc ha-ta の違いを概観することとする。K. Park は VN-Acc ha-ta 構文 (動詞的格体系) において、VN は名詞ではなく動詞であり、目的語は VN から対格を付与されるのに対し、VNP-Acc ha-ta 構文 (名詞的格体系) における VN は名詞であり、目的語は VN を主要部とする名詞句の内部にあるため、属格が付与されると仮定している。(7) は、それぞれの構文の VN を含んだ句の構造である。

(7) a. VN-Acc ha-ta 構文

[_{VP} NP-Acc VN(=V)]

b. VNP-Acc ha-ta 構文

[_{NP} NP-Gen VN(=N)]

この仮定から予測されるのは動詞的格体系に連体修飾など名詞句内部に現れる要素が現われることはなく、逆に名詞的格体系には、副詞など動詞句内部に現れる要素は現われないということであるが、この予測は次の事実によって支持される。

(8) a. *John-i ku saken-ul casey-ha-n poto-lul ha-yess-ta.

John-Nom that affair-Acc detailed (Adnominal) report-Acc do-Past-Dec

'John reported the affair in detail'

b. John-i ku saken-ul casey-hi poto-lul ha-yess-ta.

John-Nom that affair-Acc in detail (Adverbial) report-Acc do-Past-Dec
'John reported the affair in detail'

(9) a. John-i ku saken-uy casey-ha-n poto-lul ha-yess-ta.

John-Nom that affair-Gen detailed (Adnominal) report-Acc do-Past-Dec
'John reported the affair in detail'

b. *John-i ku saken-uy casey-hi poto-lul ha-yess-ta.

John-Nom that affair-Acc in detail (Adverbial) report-Acc do-Past-Dec
'John reported the affair in detail'

K. Park の分類において重要なのは、目的語の格が分類の基準となっている点である。当面、VN-ha-ta 構文については論じないが、目的語を含まない (2-4) の例の VN は、自動詞的 VN であり、VN-Acc ha-ta と VNP-Acc ha-ta の両方の構造を持ちえるため、議論の対象としては適当ではない。また、目的語が顕現していない (2-4) は他動詞的 VN の目的語が省略されたものとも解釈できるが、その場合でも両方の構造が可能であるので、同じく議論の対象としては不適当である。この点に注意し、本稿では、目的語が (対格あるいは属格で実現する) 他動詞的 VN のみを扱うこととする。

本稿では、VN と ha-ta を含んだ構文は VN が対格を取るか否かによって分類されるのではなく、目的語が対格か属格かによって、少なくとも二つのグループに分類されると考える点で、K. Park に従う。以下では、目的語が対格を伴って実現する形式、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta に限定して議論をすることとし、VNP-Acc ha-ta は議論から除外する。

K. Park (1992, 117) は、上で述べた様に、VN-ha-ta 構文についても VN-Acc ha-ta 構文と同様に、動詞的各体系と分類し、対格の有無を除いて両者の間に違いはないとしている。確かに、この二つの構文は目的語が対格を伴うという特徴に加えて、(5)、(6) でも触れた VN の連体修飾、スクランプリングに関しても類似している。

この様な類似点に基づき、K. Park はこれらを基本的に同一の構文として扱っている。そこでは、VN は (7a) の様に、VN が動詞的な最大投射の主要部であり、目的語は VN から対格と意味役割を付与されるとしている。また、VN-ha-ta 構文の VN に、韓国語固有の対格付与規則が与えられることで、VN-Acc ha-ta 構文が成立するとしている。³ 同様の分析は、H.-D. Ahn (1991, 55) でもなされている。⁴ 一方、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta の VN が目的語と構成素をなすという点では、K. Park、H.-D. Ahn と共通しているが、VN-Acc ha-ta から対格が脱落することによって VN-ha-ta が派生する

³ 韓国語では、副詞等、項ではない要素に対格が現われる場合がある。

⁴ 임흥빈 (1979) も VN に付与される対格は、韓国語固有のある種の話題化標識であるとしている点で、K. Park や H.-D. Ahn と類似している。

という分析を行っているものとして K.-S. Lee (1991, 12) が挙げられる。⁵ これらの分析では VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta は同じ構文として扱われている。

先行研究で提案されている具体的な構造はさておき、問題となっている二つの構文が同じ構文であれば同じ振る舞いが、違う構文であれば異なった振る舞いが観察されることが予測される。次節では、VN-Acc ha-ta 構文と VN-ha-ta 構文が異なった振る舞いをするを示し、これらが異なった構文であると主張する。

3. VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta

VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta が H.-D. Ahn (1991)、K.-S. Lee (1991)、K. Park (1992) などが主張する様に基本的に同じ構文であるならば、これらは同じ振る舞いをするのが期待される。⁶ 実際、これらは目的語が対格を伴うことや、2節の (5,6) で見た様な共通点も観察される。しかし、それ以外の現象についてもこれらが同じ様に振舞うか、(VNP-Acc ha-ta を正しく除外した上で) 比較検討した研究は多くない。また、VN-Acc ha-ta が二重対格構文を形成することから、この構文については、多くの研究があるが、VN-ha-ta に関する詳細な研究は多くなく、データの不十分な点があるため、これを補足するために調査を行った。また、以下では、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta を対照し、両者が様々な現象に関して異なることを示す。

3. 1. スクランプリング

VN-Acc ha-ta 構文の VN-Acc がスクランプリングできないことは (6) で見たが、ある条件を満たせば、VN-Acc のスクランプリングが許される。VN-Acc 単独でのスクランプリングは許されないが、目的語と VN-Acc が同時に移動することは許されるという観察がある。⁷

(10) a. yenge-lul kongpwu-lul Swuni-ka ha-yess-ta. K.-S. Lee (1991; 83)

English-Acc study-Acc Swuni-Nom do-Past-Dec

‘Swuni studied English.’

b. sintaylwuyuk-ul palkyen-ul Columbus-ka ha-yess-tà. O’Grady (1991; 245)

new continent-Acc discover-Acc Columbus-Nom do-Past-Dec

‘Columbus discovered the new continent.’

⁵ K.-S. Lee (1991) と同じく、対格標識が脱落することで VN-ha-ta が得られるという立場には、J.-I. Yeom (1994, 675) がある。

⁶ VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta を基本的に同じ構文とする立場をとる研究には他に、정원수 (1989)、H.-R. Chae (1997) がある。逆にこれらを区別する立場として 김영희 (1988, 92)、Sato (1993, 45, 56)、S. Park (2004, 2006) がある。

⁷ 同様の観察は、Sato (1993, 23)

K.-S. Lee (1991, 127) は、目的語と VN-Acc が構成素を成し、ha-ta の補部を成すという分析を提案しているが、上の観察は、この提案により、容易に説明できるとしている。

しかし、一方で、채희락 (1996)、H.-R. Chae (1997) は、同様の例の容認度が低いと判断している。

(11) ?*enehak-ul kongpwu-lul Chelswu-ka e ha-n-ta. H.-R. Chae (1996, 1997)

linguistics-Acc study-Acc Chelswu-Nom do-Pres-Dec

'Chelswu studies linguistics'

H.-R. Chae (1997) は、(11) の観察に基づき、目的語と VN-Acc が構成素を成すとする分析が成り立たないとしている。

本稿では、(10) と (11) の対立した観察に関して調査を行った。また、VN-ha-ta において同様のスクランプリングが許されるか否かは、筆者の知る限り言及した論考はないため、これについても調査を行った。⁸

調査の方法は以下の通りである。VN が対格を持つか否かで最小対をなす (12) の様な例文を 4 組作成し、5 人の母語話者 (韓国人 3 人、中国の朝鮮語話者 2 人) に提示し、完全に適格な文に対しては 3、完全に不適格な例に関しては 0 とする 4 段階で判断してもらった。(12) では、ダミーとして、ここでの議論と直接関係無い例 (12c-f) も混在させた。

(12)a. Columbus-ka sintaylywuk-ul palkyen-ha-yess-ta.

Columbus-Nom new continent-Acc discovery-do-Past-Dec

'Columbus discovered the new continent.'

b. Columbus-ka sintaylywuk-ul palkyen-ul ha-yess-ta.

Columbus-Nom new continent-Acc discovery-Acc do-Past-Dec

c. sintaylywuk-ul Columbus-ka palkyen-ha-yess-ta.

new continent-Acc Columbus-Nom discovery-do-Past-Dec

d. sintaylywuk-ul Columbus-ka palkyen-ul ha-yess-ta.

new continent-Acc Columbus-Nom discovery-Acc do-Past-Dec

e. palkyen Columbus-ka sintaylywuk-ul ha-yess-ta.

discovery Columbus-Nom new continent-Acc do-Past-Dec

⁸ H.-D. Ahn (1991, 28) は目的語と共に VN(-Acc) がスクランプリングができる例として下の様な例を挙げているが、この例では VN が限定詞を伴っており、VN-Acc とともに VN とも判断できるため、VN-ha-ta の VN がスクランプリングできることの証拠とはならない。

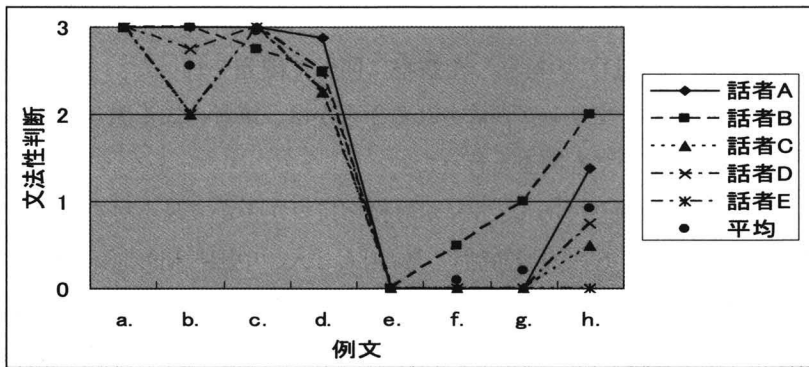
[Yenghi-ka yenge-lul kongpwu-nun] manhi e ha-yess-ta

Yenghi-Nom English-Acc study-Top a lot do-Past-Dec

- f. palkyen-ul Columbus-ka sintaylywuk-ul ha-yess-ta.
discovery-Acc Columbus-Nom new continent-Acc do-Past-Dec
- g. sintaylywuk-ul palkyen Columbus-ka ha-yess-ta.
new continent-Acc discovery Columbus-Nom do-Past-Dec
- h. sintaylywuk-ul palkyen-ul Columbus-ka ha-yess-ta.
new continent-Acc discovery-Acc Columbus-Nom do-Past-Dec

調査の結果を (13) にグラフで表した。横軸が例文、縦軸が4段階の数値を話者ごとに平均したものである。

(13)



まず、Sato (1993, 55) でも触れられているが、VN-ha-ta が VN-Acc ha-ta よりも容認度が高いことが、(13a,b) に反映されている。また、目的語と VN-Acc のスクランブリングの容認度は完全な文に比べてかなり下がるが、話者 E を除いて完全には不適格ではない。これに対し、目的語と VN をスクランブリングした (13g) は完全に不適格であると多くの話者が判断している。(13h) の元になる (13b) が若干容認度が下がることを勘案するとこの違いは一層顕著であり、VN-ha-ta 構文と VN-Acc ha-ta 構文の違いを示すと考えられる。また、(13h) の容認度の低さは (10) と (11) の観察結果の食い違いの原因と推測される。

3. 2. 副詞の挿入

VN(-Acc) と ha-ta の間に、副詞が挿入できるか否かに関しても、先行研究の観察結果には矛盾がある。VN-Acc ha-ta 構文に関しては、VN-Acc と ha-ta の間に副詞が挿入できると判断する研究者と挿入できないとする研究者に分かれている。B.-S. Park (1981)、김영희 (1988, 93)、K.-S. Lee (1991, 76, 105)、채희락 (1996)、S. Park (2006) は、VN-Acc と ha-ta の間に副詞の挿入が可能であるとしている。(14) の例は、B.-S. Park の挙げた例である。

- (14) a. Swuni-ka suhak-ul hakkyo-eyse kongpwu-lul yesimhi ha-n-ta.
Swuni-Nom math-Acc school-in study-Acc hard do-Pres-Dec
- b. Swuni-ka suhak-ul kongpwu-lul hakkyo-eyse yelsimhi ha-n-ta.
Swuni-Nom math-Acc study-Acc school-in hard do-Pres-Dec
'Swuni studies math hard in school.'

これに対して、VN-Acc と ha-ta の間に、副詞が挿入できないと判断しているのが、임흥빈 (1979, 68)、최기용 (1994, 755, 758, 761, 764) である。下の例は、임흥빈 (1979) の挙げた例である。

- (15) ?*chelhakca-nun sangsik-ul yenkwu-lul yelsimhi ha-n-ta.
philosophers-Top common sense-Acc study-Acc hard do-Pres-Dec
'Philosophers study common sense hard.'

この様に、VN-Acc ha-ta 構文だけを見ても、VN-Acc と ha-ta の間に副詞が挿入できるか否かで判断が分かれている。

次に、VN-ha-ta 構文における副詞の挿入に関する先行研究を見て行くこととする。ここでも、判断の食い違いが観察される。K. Park (1992, 29)、채희락 (1996, 425)、H.-R. Chae (1997) では VN-ha-ta の VN と ha-ta の間に副詞を挿入しても完全に適格な文が得られるとしている。

- (16) a. John-un yenge-lul yelsimi kongpwu-ha-yess-ta K. Park (1992, 29)
John-Top English-Acc hard study-do-Past-Dec
'John studied English hard.'
- b. John-un yenge-lul kongpwu yelsimhi ha-yess-ta.
John-Top English-Acc study hard do-Past-Dec

一方、김영희 (1988, 93)、S. Park (2006) では、上記の観察とは逆に、VN-Acc ha-ta 構文では副詞の挿入が許されるが、VN-ha-ta 構文では許されないという観察がなされている。次の例は 김영희 (1988) の例である。

- (17) a. Toli-nun minsok-ul yenkwu-lul cwulkot/yelsimhi ha-yess-ta. 김영희 (1988, 93)
Toli-Top ethnic custom-Acc study-Acc throughout/hard do-Past-Dec
'Toli studied ethnic customs throughout/hard.'
- b. *Toli-nun minsok-ul yenkwu cwulkot/yelsimhi ha-yessta.
Toli-Top ethnic custom-Acc study-Acc throughout/hard do-Past-Dec

この様に、観察結果が矛盾する原因としていくつかの要素が考えられる。まず、2 節で見た様に、VNP-Acc ha-ta 構文と他の二つの構文を区別せずに観察すると、正しい一般化が得られない。

例えば、채희락 (1996, 440) は VN に対格があってもなくても、VN(-Acc) と ha-ta の間に副詞の挿入が可能であるとして、次の様な例を挙げている。

(18)a. Yenghi-ka Chomsky-ey tayha-n yenkwu (manhi) ha-yess-e.

Yenghi-Nom Chomsky-on study (a lot) do-Past

'Yenghi studies about Chomsky a lot.'

b. Yenghi-ka himtu-n/elyewu-n kongpwu (yelshimhi) ha-ko iss-e.

Yenghi-Nom hard/difficult (Adjective) study (hard) do-Prog

'Yenghi is studying a difficult study hard.'

これらの例では、まず目的語が対格を伴って実現していないという点で、VNP-Acc ha-ta 構文である可能性が排除できない。更に (18) が VNP-Acc ha-ta である可能性を支持するものとして、この例で VN が連体修飾を受けていることが挙げられる。上に述べた様に VNP-Acc ha-ta 構文では、VN が名詞句の主要部をなすので、これが、連体修飾を受けるのは当然のことであるのに対し、VN-Acc ha-ta 構文では、連体修飾は容認度が下がる。従って、(18) の例は、VNP-Acc ha-ta 構文であり、VNP は ha-ta の目的語であるから、他の一般的な動詞と目的語の場合と同様、当然、副詞は目的語 (VNP) と動詞 (ha-ta) の間に現れることができる。更に VN に対格標識がないことは、会話体において、対格が脱落するという一般的な規則によるものであると説明できる。⁹ (18) の例の文末が、くだけた会話体に現われる形式で終わっていることはこの説明を支持する。従って、この様な例を元に VN(-Acc) と ha-ta の間に副詞が挿入できるか否かを論じることは適切ではない。¹⁰

上に述べた様な注意点を避けても、(14-17) に関しては依然として文法性の判断に対する違いは残ることになる。

本稿で問題としているのは、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta が同一の構文であるか否かであるため、この二つの構文が副詞の挿入に関して同じ振る舞いを示すか否かについて、両者を対比する形で、調査を行った。調査方法は 3. 1 で述べた通りであり、(19) の様な例文を用いた。

(19)a. kyengchal-un ku saken-ul cosa-hay-w-ass-ta.

police-Top that affair-Acc investigation-do-come-Past-Dec

'Police has been investigating the affair.'

b. kyengchal-un ku saken-ul cosa-lul hay-w-ass-ta.

police-Top that affair-Acc investigation-Acc do-come-Past-Dec

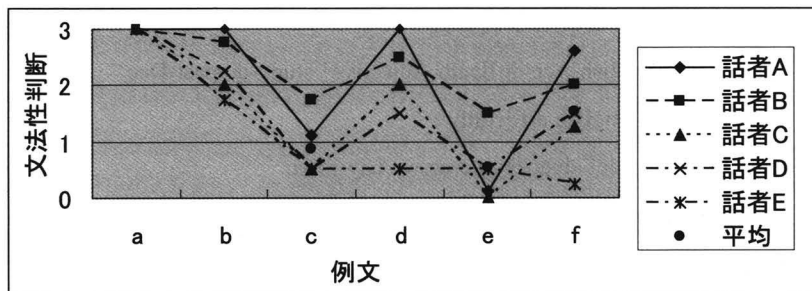
⁹ H.-M. Sohn (1999,402)、I. Lee and Ramsey (2000, 141) 参照。

¹⁰ 目的語の有無を考慮せずに VN(-Acc) と ha-ta の間に副詞が挿入できるとする議論を行っているのは、他にも B.-S. Park (1981,93)、J.-R. Kim (1994, 27) などがある。

- c. kyengchal-un ku saken-ul cosa olaystongan hay-w-ass-ta.
 police-Top that affair-Acc investigation long time do-come-Past-Dec
 'Police has been investigating the affair for a long time.'
- d. kyengchal-un ku saken-ul cosa-lul olaystongan hay-w-ass-ta.
 police-Top that affair-Acc investigation-Acc a long time do-come-Past-Dec
- e. kyengchal-un ku saken-ul cosa haykeyl-toy-ess-ul ttay-kkaci hay-w-ass-ta.
 police-Top that affair-Acc investigation until it was resolved do-come-Past-Dec
 'Police had studied the affair until it was resolved.'
- f. kyengchal-un ku saken-ul cosa-lul haykeyl-toy-ess-ul ttay-kkaci hay-w-ass-ta.
 police-Top that affair-Acc investigation until it was resolved do-come-Past-Dec

(19a,b) は VN-ha-ta、VN-Acc ha-ta の基本パターン、(19c,d) は一つの語からなる副詞が介在するパターン、(19e,f) は、副詞句が挿入されたパターンである。判断の数値を話者ごとに平均し、更に全体の平均も加えたものを次のグラフに示す。

(20)



このグラフから分かる様に、VN-Acc ha-ta に副詞が挿入された (19/20d,f) は基本パターン (19/20a,b) に比べて若干適格性が低い。しかし、VN-ha-ta に副詞が挿入された (19/20c,e) と比較すると、一名の話者を除いて一貫して (19/20d,f) の方が容認度が高い。また、(19/20c,e) 自体の容認度はかなり低い。多くの話者にとって、VN-Acc ha-ta が VN-ha-ta よりも適格性が若干低いこと ((19/20a,b) を参照) を考え合わせると、VN-ha-ta における副詞の挿入の不適格性はより顕著に現われていると言うことができよう。¹¹

容認可能性の判断には、個人差や、例文の内容等によって、ばらつきが生じることは当然あり得る。しかし、(21) で示した様に、副詞の挿入に関して、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta の間の容認可能性の違いがほとんどの話者を通じて一貫して同じパターン

¹¹ VN-Acc ha-ta の容認度が若干下がるという点には、対格の重出が関与しているかもしれない。一般に韓国語は日本語と異なり対格の重出が許されるとされているが、これに抵抗を感じる話者もいる。目的語の対格を限定詞 “to(also)” などに変えると適格性が上がるとする話者もいた。

を示しているという結果は、これらの二つの構文間に、違いがあることを示している。その違いは次のようにまとめられる。

(21) a. VN-Acc ha-ta 構文において、VN-Acc と ha-ta の間に副詞を挿入することは若干の容認度の低下があるが、可能である。

b. VN-ha-ta 構文において、VN と ha-ta の間に副詞を挿入することができない。

この結論は、임흥빈の(17)の観察、K. Parkの(18)の観察に異を唱え、김형희の(19)の観察を支持する。ここでも、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta が同種の構文であるとする、K. Park、H.-D. Ahn、K.-S. Leeらの主張に反し、これらが異なった構文であることが示唆される。

3. 3. VNの連体修飾

VNP-Acc ha-ta 構文と異なり、VN-Acc ha-ta、VN-ha-ta 共にVNは連体修飾を受けないという観察がある。まず、VN-ha-ta 構文のVNが連体修飾を受けないという観察としては次の様なものがある。¹²

(22) a. *Yenghi-ka yenge-lul elyewun kongpwu hay-ss-ta. H.-D. Ahn(1991; 21)

Yenghi-Nom English-Acc difficult (Adjective) study-do past-Dec

'Yenghi studied English difficultly.'

b. Yenghi-ka yenge-lul elyepkey kongpwu hay-ss-ta.

Yenghi-Nom English-Acc difficultly (Adverb) study-do past-Dec

'Yenghi studied English difficultly.'

次に、VN-Acc ha-ta 構文のVN-Accが連体修飾を受けないとする観察としては次の様なものがある。¹³

(23) *chelhakca-nun sangsik-ul kiph-un yenkwu-lul ha-n-ta. 임흥빈 (1979; 67)

philosophers-Top common sense-Acc deep (Adjective) study-Acc do-Pres-Dec

'Philosophers study common sense deeply.'

以上の例を見ると、VN-ha-ta、VN-Acc ha-ta 共に名詞修飾を許さないように見える。しかし、特にVN-Acc ha-ta 構文に関して、上記の判断に異を唱える研究者もいる。^{14・15}

¹² 他にも、J. Yoon(1991)、K. Park (1992,73)、최희락 (1996,449)、Hong and Sohn (1999)、S. Park (2006)に同様の指摘がある。

¹³ 他にも、H.-S. Han (1988)、H.-D. Ahn (1991, 26)、K. Park (1992,73)、K.-S. Lee (1991, 104)、J.-I. Yeom (1994)に同様の指摘がある。

¹⁴ K.-S. Lee (1991,106)は(23)に挙げたB.-S. Park (1983)の例の文法性の判断に関して疑義を唱えている。

¹⁵ 최기용 (1994)は広い範囲に渡る観察に基づいて、同様の結論を得ている。そこでは、VN-Accの連体修飾が一律に適格なわけではなく、不適格になる形容詞が存在すること、また、節による連体修飾は全て不適格であることが指摘されている。H.-R. Chae (1997)もVN-Accの連体修飾が可能とされている。

- (24) Toli-nun minsok-ul seymilha-n yenkwu-lul ha-yess-ta. 김영희 (1988, 96)¹⁶
 Toli-Top ethnic custom-Acc detailed (Adjective) research-Acc do-Past-Dec
 'Toli researched the ethnic customs in detail.'

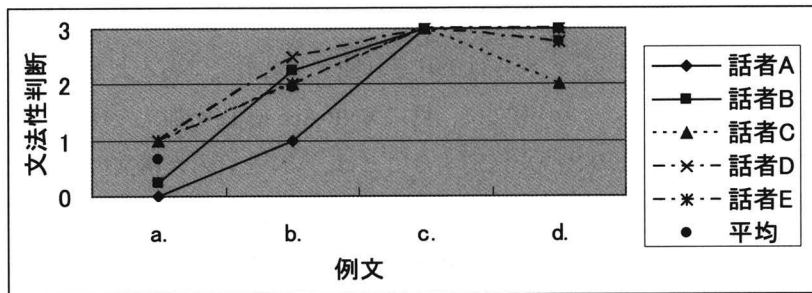
一方、VN-ha-ta 構文の VN が連体修飾を許すという指摘は多くない。채희락 (1996; 440)が、(18)の様な例を挙げているのが目につく程度である。先に述べた様に、(18)は VNP-Acc ha-ta 構文である可能性があり、ここで論じるのに適当な例ではないため、ここでは、検討しない。¹⁷

VN(-Acc) の連体修飾に関しても、上記二つの現象と同様の調査を行った。調査では以下の様な例文を 4 組使用した。

- (25) a. yenkwuca-tul-i DNA-lul chelceha-n yenkwu-ha-ko iss-ta.
 researchers-Pul-Nom DNA-Acc through (Adjective) research-do-Prog-Dec
 'The researchers are investigating DNA thoroughly.'
- b. yenkwuca-tul-i DNA-lul chelceha-n yenkwu-lul ha-ko iss-ta.
 researchers-Pul-Nom DNA-Acc through (Adjective) research-Acc do-Prog-Dec
- c. yenkwuca-tul-i DNA-lul chelceha-key yenkwu-ha-ko iss-ta.
 researchers-Pul-Nom DNA-Acc thoroughly (Adverb) research-do-Prog-Dec
- d. yenkwuca-tul-i DNA-lul chelceha-key yenkwu-lul ha-ko iss-ta.
 researchers-Pul-Nom DNA-Acc thoroughly (Adverb) research-Acc do-Prog-Dec

それぞれの例文に対する話者の判断を、(26) に示した。

(26)



(25/26c,d) は VN-ha-ta、VN-Acc ha-ta 構文に副詞形が用いられた例であり、これらが適格であるという判断は予想された通りである。VN-Acc ha-ta の VN-Acc が連体修飾を受けると不適格になるという判断は上に見た様に多くの研究者の間で一致してい

¹⁶ 김영희 (1988,96) は選択制限に抵触しない形容詞を選べば、VN の連体修飾は可能であるとしている。

¹⁷ 최기용 (1994) も、目的語が実現しない VN-Acc ha-ta の場合、連体修飾が可能であることを指摘しているが、これも VN-Acc ha-ta 構文と VNP-Acc ha-ta 構文を明確に分け、後者は通常の名詞句と変わらないとする K. Park の分析で容易に説明できる。

るが、(25/26b) では容認度が比較的高いという結果が得られたのは予想外であった。VN-ha-ta の連体修飾(25/26a)は、(25/26b)に比べても容認度が顕著に低い。ここでも、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta は明瞭な違いを示し、両構文が同じ構文であるとする主張に対する反証となる。

4. データのまとめと調査法

4. 1. データのまとめ

本稿では、VN と ha-ta を含む形式の内、他動詞的 VN に限定して、その分類について論じた。2節では、K. Park(1992) に従い、VN-Acc ha-ta 構文と VNP-Acc ha-ta 構文が異なる構文であるとした。後者は、VN が名詞句の主要部をなし、また、名詞句全体は通常の名詞句と同じ振る舞いをするのに対し、VN(-Acc) ha-ta 構文では、VN に名詞的な特性が見られないことから、これらを異なったグループとして扱うことを妥当と判断した。また、妥当な分類を得るためには目的語を含む事例を用いて議論をしなければならないことを注意点として取り上げた。

3節では、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta が同一の構文の変種の関係にあるか否かを検証するため、i) VN(-Acc) のスクランプリング、ii) VN(-Acc) と ha-ta の間への副詞の挿入、iii) VN(-Acc) の連体修飾に関して、両者を比較した。VN-Acc ha-ta に関しては i)-iii) に関するデータは先行研究の中に（観察結果の食い違いはあるものの）多く見られるが、VN-ha-ta に関しては当該現象に関するデータが不足しているため、本稿で行った調査はこの空隙を埋めたものと言える。結論として、表面的な対格の有無に加えて、上記の3つの現象に関して、VN-ha-ta と VN-Acc ha-ta は明らかに異なった振る舞いをすることから、これらはそれぞれ独立した構文であると考えられる。先行研究の中には、これら二つの構文に、更に VNP-Acc ha-ta を加えた構文を明確に区別しないものもある。この3つを区別することは、VN を含んだ構文の特性の解明に寄与することにつながる。

3節で触れた様々な現象における観察結果の食い違いと、本稿で提示した調査結果とは相関がある。目的語と VN-Acc のスクランプリング (13h)、VN-Acc と ha-ta の間への副詞の挿入 (20d,f)、VN-Acc の連体修飾 (25b) に関して研究者毎に、判断が異なっているが、これらは本稿の調査では、完全に適格な文に比べて容認度が低い、完全には不適格ではない。この容認度の中間的な性質が、先行研究の判断の揺れとなっていると考えられる。この容認度の低下が文法に由来するのか、文法以外の他の要因に由来するものかを明らかにする必要があるであろう。

4. 2. 調査法

最後に、本稿での調査法及び、データの扱いに言及しておく。

まず、調査に協力してもらった母語話者は言語学専攻の大学院生4名と、言語学科在籍の学部生1名である。言語学専攻の話者に限定した理由として、母語の容認度を判断するという日常行わない、いわば「異常な」作業の意味を理解している話者を対象とすることで、調査が円滑に進み、また、安定したデータが得られると考えられたためである。実際、言語学と関係の無い一般的な話者を対象に調査すると、調査の対象となっている項目以外の要素が容認度の判断に介入することが言語学を知っている話者より多くおこる。

次いで、今回の調査は全て対面で、例文を発音してもらいながら行った。これは、調査票で提示した例と、話者の判断の入力になる例を一致させるためである。特に容認度の低い例の場合、話者が無意識に適切な文に直して判断することがある。発音しながら判断すると、この様な問題は起こりにくい。

次に、本稿でのデータの扱いについて述べる。本稿では容認度を数値化した¹⁸が、容認度の数値化には絶対的な基準がなく、あくまで目安に過ぎないことに注意しなくてはならない。¹⁸完全に適切かつ単純な例文であれば本稿のスケールでは、3という数値が安定して得られるであろう。しかし、容認度が低い文を、例えば0と判断するか、1と判断するか話者によって違いが出ることが当然予想される。今回の調査では完全に不適格な例を0としたが、「完全に不適格」な例として話者がどのような例を想定するかによって、当然、判断は変わり得る。また、完全に良い例と悪い例に大きく差をつけない話者もいれば、「メリハリの利いた」判断を下す話者もいることも当然考えられる。

むしろ重要な点は、容認度の判断を表すグラフ上のパターンが、殆ど話者、殆ど例文について、同じパターンを描いているという点にある。即ち、ある文が、他の文より容認度が相対的に低い、あるいは高いという判断は、話者や例文が変わっても一致するという結果が得られたことは、韓国語/朝鮮語話者の直観をかなりの程度反映していると言えるであろう。数値を用いたのはこのような調査結果の視覚化を容易にするためであり、それ以外の個々の値を絶対視するものではない。

生成文法で用いられるデータは話者の直観に基づいた判断を用いることが多いが、あるデータが誰から得られたものか、どの様な調査方法が採られたかといった生のデータについて議論されることは筆者の知る限り多くない。生成文法が経験科学を目指すのであれば、データの収集方法とその体系化は避けて通れない問題であろう。本

¹⁸ 上山(2005)は容認度の計測に数値を用いることを試みているが、同時に、様々の問題点も指摘している。また、生成文法におけるデータの扱いの根本的な問題を論じている。

稿は、完全ではないものの生のデータに近いデータを提示し、上記の現状に対する問題提起を行った。

謝辞

本稿の作成に当たって、調査に協力して下さった、김경애、김영주、박경화、신영희、허인영の各氏に感謝する。また、本研究は科研費（課題番号：21520407）の助成を受けたものである。

参考文献

- Ahn, Hee-Don 1989 "On Light Verb Constructions in Korean and Japanese," J/K Conference 1, 221-237.
- Ahn, Hee-Don 1991 *Light Verbs, VP-movement, Negation and Clausal Architecture in Korean and English*, Ph.D. Dissertation, University of Wisconsin, Madison.
- 채희락 1996 "'하-'의 특성과 경술어구문," *Language Research* 32 409-476.
- Chae, Hee-Rahk 1997 "Verbal Nouns and Light Verbs in Korean," *Language Research* 33 581-600.
- 최기용 1994 "한국어의 경동사구문 판정에 대하여," Young-Sun Kim et al. (eds.) *Explorations in Generative Grammar*, Hankuk Publishing, 750-781.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester 1988 "Light Verbs and Theta-Marking," *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Han, Hak-Sung 1988 "Light Verbs and Verb Raising," *Language Research* 24, 565-581.
- Hong, Kyoung-Sun & Young-Sook Sohn 1999 "A VP-Shell Approach to Ha-Verb Complex," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 8, 354-369.
- 임홍빈 1979 "용언의 어근 분리 현상에 대하여," *언어* 4, 55-72.
- Kim, Jeong-Ryeol 1991 *A Lexical-Functional Grammar Account of Light Verb*, Ph.D. Dissertation, University of Hawaii
- 김영희 1988 *한국어통사론의 모색*, 탑출판사, 서울
- Lee, Iksop and S. Robert Ramsey 2000 *The Korean Language*, State University of New York Press, New York.
- Lee, Keon Soo 1991 *Multiple accusative constructions in Korean and the Stratal Uniqueness Law*, Ph.D. Dissertation, University of Hawaii
- O'Grady, William 1991 *Categories and Case: The Sentence Structure of Korean*, John

Benjamins, Amsterdam

- Park, Byung-Soo 1981 "On the Double Object Constructions in Korean," 언어 6, 91-113.
- Park, Kabyong 1989 "A Lexical Approach to the Syntax of Compound Verbs," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 3, 319-327.
- Park, Kabyong 1992 *Light Verb Construction in Korean and Japanese*, Ph.D.Dissertation, University of North Carolina, Chapel Hill
- Park, So-Young 2004 "The Structure of Verbal Nouns and the Complex Predicates in Korean," 언어학 40, 85-112.
- Park, So-Young 2006 "No Incorporation in Verbal Noun Constructions," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 11, 683-696.
- Sato, Yutaka 1993 *Complex Predicate Formation with Verbal Nouns in Japanese and Korean*, Ph.D.Dissertation, University of Hawaii
- Sells, Peter 1994 "Sub-phrasal Syntax in Korean," *Language Research* 30, 351-386.
- Sells, Peter 1999 "Constituent Ordering as Alignment," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 8, 546-560.
- Sohn, Ho-Min 1999 *The Korean Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 서정수 1975 "동사 '하-'의 문법," 형설출판사, 대구.
- 上山あゆみ 2005 「経験科学としての生成文法 - 文法性と容認可能性 -」九州大学言語学論集25,26, 189-213.
- Yeom, Jae-Il 1994 "The Light Verb Construction in Korean: 'Verbal Nouns' as Maximal Projections," in Young-Sun Kim et al. (eds.) *Explorations in Generative Grammar*, Hankuk Publishing, 653-678.
- Yoon, Hang-Jin 1997 "Denominal Verb in Korean," 언어 22, 651-666.
- Yoon, James Hye-Suk 1991 "Theta Operations and the Syntax of Multiple Complement Constructions in Korean," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 4, 433-445.